

賊兵淀城ヲ棄テ、  
 一 候得共終ニ味方勝利と成賊敗走ニ淀も溜りの八幡ニ走る  
 一 淀ニ賊兵退散城中ニ點檢を受ケ官軍を迎候事  
 一 六日八幡ニ合戦薩長兵相合砲戦賊途ニ敗走山崎固免藤堂勢 官軍ニ屬  
 し前面より砲發ニ及候故大ニ賊潰走八幡ニ若州勢宮津勢相固要所ホ  
 せニ賊手配嚴重砲臺等築造此ニ取らせて不相成との評議ニ由ホせ凡  
 長薩山ニ後ハ關門ニカ、砲發藤堂ニ前面より打立候故争てゐたる  
 るニ終ニ敗北八幡前橋本ニ戰モ相應烈敷候由  
 一 三日ヨリ今日迄四日ニ連戦晝夜ニ掛苦戦士藝ニ一日位戰候迄ニ薩長  
 兩藩ニホ全クノ勝利と相成實不可謂ニ苦戰ト云ヘし初戰より一日も敗  
 走無之寸歩も退スルヲ無之四日ニ間大石を千尋ニ嶺ヲ轉スル如勢与  
 可申凡賊兵會桑備中松山志州大垣高松等ニ人數ニホ合二千餘ニモ及候  
 半元ハ會桑暴徒頼切スル人數盡ク打散セ實大愉快ニ堪ヘサル次第ニ  
 一 今日於

内容見本  
 (70%縮小)

參卷 (文久三年九月)  
 一 宮市小栗其外惣ホ五里四面位ニ新ニ御番所御出來  
 一 公義蒸汽船ニホ御下リ之御目附中根市五郎上下七八人小栗ハ滞在ニ處  
 何者共相知七月十九日内六人及切害二人ハ逃去候由  
 一 三田尻御茶屋ニ雲上人七人御滞館被爲在候  
 一 長州專ラ自國ニ警衛ニホ外々ハ押出相成候体ハ無之  
 一 奇兵隊組之内私共間屋伊勢屋小四郎ト申者御懇意ニホ小倉ト及合戦候  
 得々一時勝利可有之候得共内輪崩レニ相成候ホ異船打拂ノ邪魔ニ相  
 成事故宜敷無之ト啻有之由  
 一 八月十八日比中山侍從様大和ニ内天川ト申處ハ浪士多勢御召列御代官  
 始役人八人も切捨ニ相成御引籠リニ相成候由  
 一 正親町様當月初筑前黒崎迄御渡被遊候處九月十一日俄ニ三田尻ハ急ニ  
 御渡ニ相成申候風説ニ御大名方ハ打方被 仰付御人數黒崎ハ御差向ニ  
 相成候得共御引取後ニ相成候由

仁和寺宮八幡邊戰  
 御所徳大寺様ハ 征東將軍宮 思食ニホ東久世卿島丸卿ヨリ御書面議  
 定衆ハ御到來ニ由ニホ拜見被 仰付其趣小ヲ參謀被仰付度との事ニホ  
 差支ニ有無御尋ニ候間岩下氏ハ相談何モ差支無之旨御答申上候處  
 早々東寺ハ罷出候様御沙汰ニホ今晚五時分ハ東寺 御本陣ニ參向直ニ  
 宮御前ニ被召軍事參謀申付との 御沙汰ニホ謹ホ御受申上る  
 一 七日將軍宮淀城ハ御轉陣ニ付今早曉御先ハ差越城中手當旁相達候晝過  
 宮御着陣被爲 在候  
 一 東久世卿澤卿爲御巡見八幡橋本御出ニホ小子隨從差越候戰地悉ク巡見  
 ニホ暮時分歸る途中戰地ニ次第屍木其儘ニホ最も所々燒失目も當らセ  
 ぬ有様ニ

仁和寺宮八幡邊戰  
 一 八日巳刻比ハ八幡邊戰地爲 御巡覽 宮御出ニホ錦ニ御旗を被飄威風  
 凜烈誠ニ言語難盡心地ニホ候老若男女 王師を迎候ホ難有クといえ  
 る聲涙ニ及候 八幡宮ハ 御參詣八幡關門迄被爲向長薩隊長被召戰  
 五卷 (明治元年正月) 四百二十七

一 下ノ關方ハ軍艦惣大將トして國司信濃今ニ出張候由  
 一 奇兵隊組々頭宮城彦助与申人少ニ一件ニ付先砲隊組与争論起リ彦助及  
 切腹其後も和合無御坐由ニホ奇兵隊組三百人位當月五日山口ニ御引取  
 ニ相成外之御組ニ七八百人下關ハ交代相成候由  
 一 右ニ節公義蒸汽船ハ奇兵隊ト乗船ニホ三田尻ハ廻船子今滯舟ニ由  
 九月十五日 清太郎 庄藏

右駕中ニホ記置  
 九月廿二日  
 久住御立 六ツ時 二里餘  
 上四口村 御立場 一里餘  
 堤 御小休 伊東太次郎 一里  
 小本田原 御野立 一里計  
 參卷 (文久三年九月) 二百二十五

限定三百部復刻



上・下卷

大久保利通日記

維新史解明の根本史料!

勝田政治編「人名索引」を別冊添付



會桑二條城ヲ固ム

一 會桑直様二條城ニ登城其マ、退城無之惣體入込ミ候由

一 有栖川宮山階宮仁門公中山中御門大原万里小路長谷其餘有志公卿盡ク御參之

小御所會議  
岩倉卿容堂ヲ論破  
ス  
利通硬論ヲ主張ス

一 今夜五時於 小御所御評議越公容堂公大論公卿を挫き傍若無人之岩倉

公堂々論破不堪感伏 君公云々御議論容堂公云々御異論不得止予席を

進ミ云々及豪論候後藤中を取テ論越土之論直様慶喜を被召候与之趣ニ

而全扶幕之論之一應 御勘考 御退坐其内後藤ハ予ニ云々談論有之候

得共兼而決定之國論を以敢不動越尾終ニ御受ニ而二條城ニ御行向御盡

力御決相成候再度於 小御所御評議尾越より御受被爲在候三字頃盡ク

御退散

慶勝慶永二條城ニ  
至リ慶喜ニ朝旨ヲ  
傳フ

一 十日四時御參 朝尾公越公暮時分御參越公入夜御參城中之次第下鎮撫

難行届後藤より亦々相談ニ預候得共斷決を以答ふ其内反復之論有之種

々及詰問候處甚まきらじしたりのミ終ニ閉口形行越公に言上候所非常

之御決斷被爲在予を被召明日以死二條城に御登城御盡力可被爲在段御  
沙汰實不堪感服次第之於 小御所御評議八時御退散

一 十一日四時御參尾公入夜御參君公御參おし

慶喜會桑ヲ率半下  
坂

一 十二日御參藝公御參尾公入夜御參予を被召今日城中之御盡力云々會桑

を引下坂御受書等之次第云々承知於 小御所言上云々

岩倉公兩策ヲ示ス

一 十三日四時非藏人口に參北岡公ハ第一等第二等云々談合候様承知於邸

中岩西談合亦々參

内及返詞入夜退散亦々夜半依 召參 朝いたし候

一 十四日今日土越御參北岡公ハ華城之次第云々御詰問 小御所御退散之

人材擧其他ノ件

上云々御内談且人材御撰擧云々城中密議云々北岡公よテ承知於御邸(岩倉)

西吉品會議決定西品全道北岡公に參殿及言上候

一 十五日今朝北岡公に參殿撰擧一條云々御尋ニ而云々申上ル且尙亦城中

之次第有之上長上京云々ニ取究申上候様承知於邸中岩公西品談合全道非



## 『大久保利通日記』から見る明治維新

国士舘大学文学部教授 勝田 政治

明治維新を最も主体的に担った政治家大久保利通。この大久保の軌跡を追究する基本史料となるのが、日本史籍協会から刊行された昭和二年（一九二七）の『大久保利通日記』全二巻、および同年から昭和四年（一九二九）にかけての『大久保利通文書』全一〇巻である。後者は、平成一七年（二〇〇五）に既にマツノ書店から復刻されたが、このたび前者の『大久保利通日記』も同書店から復刻されることになった。大久保研究、ひいては明治維新史研究にとって大きな意義を持つものである。

『大久保利通日記』は、大久保利通の遺族の精力的な編集活動の成果である。大久保家では、安政六年（一八五九）二月から明治一〇年（一八七七）三月までの日記原本を保存していたが、明治三二年（一八八九）の火災でその半ばを焼失し、写本も散逸してしまった。そこで、大正七年（一九一八）に日記の整理を企画し、残存している原本以外、宮内省図書寮・文部省維新史料編纂事務局・島津家・岩倉家所蔵の写本を借り受け、厳密なる相互の比較対照・校合を行って原稿を作成した。原稿作成には、維新史料編纂官で『大久保利通伝』の著者勝田孫彌と同編纂官薄井福治が携わり、大久保利通の五〇周忌にあたる昭和二年（一九二七）に刊行した。

また、大正一〇年（一九二二）に大久保利武（利通の三男）が「弘化五年正月改公用書付諸覚書」を発見し、その裏面に嘉永元年（一八四八）の日記があることを確認した。難解な字体であるため解読に手間取り、昭和二年の『大久保利通日記』には間に合わず、昭和四年の『大久保利通文書』九の「補遺」に収録することになった（嘉永元年分はその後、昭和四四年（一九六九）に東大出版会から復刻された『大久保利通日記』二に収められた）。このように、日記の記述範囲（時期）は、嘉永元年および安政六年一二月から明治一〇年三月となる。その間欠けている時期もあるが、慶応三年（一八六七）から明治四年（一八七二）、および明治七八年（一八七四・五）はほぼ毎日の記述となっている。前者の五年間は、王政復古による江戸幕府の倒壊から廃藩置県という明治維新の最も重要な時期であり、後者の二年間は大久保が主導する明治政権がスタートする時期である。

大久保の日記は「比較的簡単であり、木戸孝允の日記などにくらべて内容的にやや単純なもの」（小西四郎『大久保利通日記』二「解題」）と評されているが、緊迫感あふれた迫力ある記述や自らの感懐を示す記述も少なからずある。また、何と云っても明治維新における最重要人物、大久保自身の証言集なのである。いくつかの事例を見ていこう。

慶応三年九月、大久保は山口を訪ね、長州藩主父子以下首脳部に王政復古クーデター計画を次のように説明し、同藩の同意を得る。幕府が「公論を拒み私意」を「増長」していることから「遂に決策二及」ぶことにした。「今日に至り人事も至り尽し此上傍観座視する時は他日一層之害ヲ増し」て、「皇国」が倒れるおそれがあることから「不得止」実行するものである。薩摩一藩で皇居を封鎖するが、「一藩之微力」では困難なので長州藩の「御救応」をお願いする次第である。これは、「死して以て尽し奉ル格護（覚悟）」である。

さらに、クーデターの直前になって尻込みする公家の正親町三条実愛に対し、次のように言い放って同意させる。薩摩藩主自ら兵を率いて京都へ向かうのは、「王政復古之基本ヲ立」てるためであり、「是非断然之尽力に非されは成功難致平々之尽力を以御基本相立候事は不存寄候」。勅命に反する者は「掃蕩」する「決心」である。このような「一大機会と云ものは千載之一時」であるから、「朝廷」においても「非常之御尽力」がなければ「大ニ失望」する。そして、クーデター断行に向けて薩摩・尾張・越前藩兵が京都御所を封鎖した様子、  
子、「我兵を以禁闕警衛之様未曾有之壯觀見る者胆を失ふ」と記している。

王政復古後、徳川慶喜の辞官納地問題から「今日に決せんハ大事差迫る」と「熟慮」し

「戦二決」して戊辰戦争に突入し、廢藩置県に対しては「篤と熟考今日ノマ、ニシテ瓦解せんよりハ寧口大英断ニ出而瓦解いたしたらんニ如す」と決断する。

西郷隆盛の朝鮮使節派遣論（征韓論）に対しては、閣議で「断然前議ヲ以主張」あるいは「断然不相変旨申上候」と反対論を主張し敗北するも、「他ニ挽回ノ策ナシトイヘトモ只一ノ秘策アリ」と宮廷工作によって西郷派遣を阻止する。そして、佐賀の乱を起こした江藤新平の主張を「曖昧実ニ笑止千万人物推而知ラレタリ」と切捨てる。

台湾出兵問題による清国との交渉については、開戦となれば「人民ノ議論」は言うまでもなく、諸外国の「誹謗ヲ受意外ノ妨害ヲ蒙リ終ニ我独立ノ権理ヲ殺クニ至ルノ禍ヲ免サル虞ナシト謂フヘカラス然レハ和好ヲ以事ヲ纏ルハ使命ノ本分ナレハ断然独決」し、戦争回避の意図を貫いて決着させた。ここに紹介した事例は、ごく一部分でしかない。

『大久保利通日記』は研究者だけではなく一般の人々にとっても、明治維新の内実を理解するにあたって、多くの素材を含んでいる一級史料である。

最後に、復刻にあたって新たに「人名索引」を付したことを添えておきたい。

■本書は昭和四四年以降、東京大学出版会などから三度も復刻されたにもかかわらず、今も古書での入手は出来ません。

■本書編集上の特色は「大久保利通文書」同様、大久保家遺族の利通への敬愛と学問的良心に満ちた、質量共に最高の「頭注」にあります。この最高の手引きのためにも、専門家以外のお方に広く一読をお奨めいたします。

■今回最大の目玉は、勝田政治編「大久保利通日記・人名索引」です。本書に出てくる人

名すべてを日本人と外国人に分け、五十音順に配列したこの「索引」によって、本書の利通価値は飛躍的に高まるでしょう。

■巻末には昭和四年刊『大久保利通文書』に初めて掲載された「嘉永元年日記」計五七頁も転載いたします。

■復刻用原本には今回も大久保利泰氏より、昭和二年刊の「大久保家蔵版」を提供して頂きました。もちろん同年刊「日本史籍協会叢書版」の基になったものです。

## 大久保家に流れるもの

一坂 太郎

立教大学名誉教授を務められた大久保利謙氏（故人）は、大久保利通の直系孫にあたる。ところが日本近代史の大家であるにもかかわらず、個人的にほとんど利通について語ることをせず、公私の別を厳然と分けておられた。その毅然とした態度には、「為政清明」をモットーとした利通の像が重なって見えた程だ。

いまから二十年ほど前、私はある出版社の仕事で東京成城の大久保家を訪ね、利通曾孫の利泰氏（利謙氏の子息）より大久保利通日記自筆原本を、拝見させていただいたことがある。それは、日本近代史そのものを掌中にしたような、貴重で贅沢な経験だった。

日記は全部で七冊、サイズは手帳大から週刊誌大ほどまでさまざまだった。うち一冊は明治半ばに火災に遭って焼損しており、そのため台紙に貼られ、製本し直されていた。この痛々しい一冊が、なぜか最も印象に残っている。

その後、神保町の古書店で日本史籍協会編『大久保利通日記』上下巻を見つけ、迷わず購入した。昭和二年に限定三百部出た革張りの初版本で、全部で一千ページほど。生麦事件や小御所会議などの大事件が当事者の目で生々しく記録されており、興味は尽きない。

さらに、私を魅了したのは侯爵大久保利和・伯爵牧野伸顕・大久保利武という利通の息子たちによる「緒言」だった。そこには出版に至る経緯が、淡々とした筆致で説明されている。

それによると『大久保利通日記』は、大久保家の七冊をそのまま活字にしたのではないようだ。安政六年から明治十年に至る日記は



すべて大久保家に保存されていたが、明治二十二年の火災で「其半ハ烏有ニ帰シタ」そうだ。私が見た七冊は、かろうじて焼け残った部分だったのである。

しかし、さすが維新の立役者の日記と云うべきだろう。没後十年ほどしか経ていないのに焼失前、すでに「太政官修史局ニ於テ原本ヨリ謄写シ編シテ十巻」が作られていた。だ

がこの写しも同局廢止後に散逸したため、息子たちは大正七年から日記の復元を始める。宮内省図書寮・維新史料編纂局・島津家編輯所・岩倉公爵家が所蔵する日記の写しを借り集め、数カ月をかけて「彼此対照、厳密ナル校合」を行ったのだ。こうした地道な作業を経て、利通五十年忌に出版されたのが『大久保利通日記』だったのである。

利通は大変な子煩悩だった。明治四年、岩倉使節団に加わり洋行するさいは十二歳の利和と九歳の伸顕をアメリカ留学のため、連れて行ったほどだ。

ところが息子たちは緒言の中で、そのような父との思い出は一切記さない。「先考（利通）ノ日記及文書カ其資料ト為リ、修史ニ多少貢獻スルトコロヲ得ハ、不肖等一門トシテ最モ意義アル追悼記念ト為リ、本懐之ニ過キサルナリ」との思いをもって、しめくくられる。

それは息子が亡父の遺稿集に寄せたとは到底思えぬほど、私情を一切排した、冷静で気品ある緒言だ。あくまで歴史史料として『大久保利通日記』を世に送ろうとした崇高な志が、はっきりと見える。それが研究者の利謙氏へも受け継がれた、大久保家のDNAなのだ、つくづく感じた。だからこそ出版八十年を経てなおその価値は不朽で、こうして復刻されるのである。

■体裁 A5判 全二巻十人名索引 上製箱入 計一四〇〇頁  
■定価 二万五千円（税込・〒590）  
■予約特価 二万円（税・〒込）  
■特価締切 平成19年9月30日  
■発売 平成19年11月1日  
■限定三百部復刻（番号入）

▼書店不卸 ▼締切厳守  
山口県周南市銀座2-13  
マツノ書店  
☎0834-2295